JSTCT Letter No.97
Japanese Society for Transplantation and Cellular Therapy
一般社団法人 日本造血・免疫細胞療法学会
January 2025

目　次

第47回日本造血・免疫細胞療法学会総会開催のご案内 …… ii－iii

認定・専門医制度委員会からのお知らせ …… iv－v

看護部会企画「学会看護の見どころ」 …… vi－vii

私の選んだ重要論文「東海大学内科学系血液腫瘍内科　鬼塚　真仁 先生」…… viii

施設紹介「虎の門病院　血液内科」 …… ix－x

会員の声「日本赤十字社愛知医療センター名古屋第一病院　血液内科　西田　徹也 先生」…… xi

各種委員会からのお知らせ …… xii

● **未納分年会費のご納入について**

未納分の年会費につきましては、通年ご納入いただくことが可能ですので、学会HP「年会費について」をご参照の上、お早目にご納入いただきますようお願い致します。会員マイページからクレジットカードでのご納入も可能となっておりますので、ご検討いただけましたら幸いに存じます。

● **本学会会員情報へのご登録内容変更について**

ご勤務先の変更等に伴いご住所、メールアドレス等会員登録情報に変更がございましたら、会員マイページよりご変更いただくか、Eメール、FAX等にてお早目に事務局までお知らせください。
→学会HP「登録情報の変更・休会・退会について」

● **ご登録いただいているご住所について**

本学会では、会員の皆様に対する重要書類、学会総会抄録号などはご登録頂いている住所にお送りしています。宛先不明で返送されてしまった場合、それ以上の対応ができなくなるおそれがありますので、ご自身でのご対応をよろしくお願い申し上げます。

● **ご登録いただいているメールアドレスについて**

本学会では、皆様に対する各種ご案内の多くをEメールにて配信しておりますが、昨今、アドレス変更の届出漏れが多く、メールが不達となる会員の方も多数みられます。一定期間、事務局からのメールが届いていない方は、一度、事務局（jstct_office@jstct.or.jp）までお問合せくださいますようお願い申し上げます。

【JSTCT事務局より】

第47回日本造血・免疫細胞療法学会総会開催のご案内

会期：令和７年（2025年）２月27日（木）・28日（金）・３月１日（土）
会場：大阪国際会議場（グランキューブ大阪）・リーガロイヤルホテル

第４７回日本造血・免疫細胞療法学会総会　会長　　日野　雅之
（大阪公立大学大学院医学系研究科　血液腫瘍制御学　教授）

第47回日本造血・免疫細胞療法学会総会を大阪万博の直前、2025年2月27日（木）から3月1日（土）、大阪国際会議場（グランキューブ大阪）・リーガロイヤルホテルで開催させていただきます。

既に前期参加登録（2025年2月12日まで）を始めており、多くの方に登録いただいております。

第1日目（2月27日）には、WG成果発表会、HCTCラウンジに加えて、「笑顔プロジェクト」として体験型のアピアランスケアハンズオン講習会（事前予約、当日飛び込み参加も可能）、患者さんのニーズをお聞きするセミナーを企画しておりますので、お時間が許す方は第1日目からご参加いただければ幸いです。

第2日目（2月28日）からは、プログラム委員をはじめ多くの皆様のご協力をいただき、特別講演「The cutting edge of PTCy-based HCT in the world」、プレミアム企画シンポジウム「腸内細菌叢とGVHD：治療への新たな道を切り開く」、シンポジウム「CAR-Tの基礎研究」、「CAR-T療法・二重特異性抗体を用いた治療の実際」、「未来型LTFU：多彩なサバイバーシップを支える次世代のケア」、「産学連携で取り組むCAR-T細胞治療後のフォローアップ ～長期合併症への挑戦～」、「GVHDの新知見」、「小児疾患に対する移植医療の実際」、スポンサードシンポジウム「造血器腫瘍におけるがんゲノム医療への課題と期待」、「新規薬剤時代の多発性骨髄腫治療戦略」「薬物相互作用の観点から最適な真菌感染マネジメントを考える」、「造血細胞移植後の晩期合併症に対する長期フォローアップの重要性」、「造血幹細胞移植の現状と展望」、JSTCT-KSBMT Joint Symposium「Endothelial Damage Syndrome」、ワークショップ「PTCy移植」、「リハビリテーション専門職が考える造血・免疫細胞療法における現在地と未来」、「難治性慢性GVHDに対するECP治療」、Pros・Cons「難治性急性GVHDに対する2次治療の選択；MSC vs Ruxolitinib」、「ドナーの選択」、造血幹細胞移植推進事業フォーラム、JDCHCT/全国調査ニュース、看護シンポジウム「血液疾患患者の治療選択における意思決定支援」、看護教育講演「がん治療を支える栄養支援～生きる力を育む食～」、「アドバンス・ケア・プランニングと緩和ケア」、「実臨床における慢性GVHDの診断と治療」、看護ブラッシュアップ研修「就労／就学支援　患者さんの声を活かした支援」、HCTCワークショップ「多様な家族背景をもつ患者・ドナーの支援」、「ドナーの適格性を考える」、HCTCラウンドテーブル「初心者HCTCの困りごとをみんなで考えよう」、チーム医療「移植患者の治療と生活をつなぐ在宅医療～病院から在宅へ患者の笑

顔をつなごう〜」、特別教育講演「ドナー安全講習」、教育講演（オンデマンド）、ランチョンセミナー（事前登録）、スイーツセミナー（事前登録）、ブレックファーストセミナーを準備させていただきました。

一般演題は海外からの応募9演題を含め501演題（プレナリー3演題、口演298演題、看護口演16演題、ポスター184演題）を採択させていただきました。なお、ポスターセッションは飲み物や大阪のお菓子を用意し、緊張を解き、リラックスして議論ができるようにさせていただければと思います。

第3日目（3月1日）の市民公開講座では、第1部「みんなが笑顔になりますように−SMILE−」に続きまして、第2部では日頃から骨髄バンクの活動に多大な貢献をしていただいている学生サークルの皆様方とコラボした企画「Donation of young people, by young people, for young people」（若者のための若者による若い世代のドナー登録）、第3部では「アクション！ 緊急学生ミーティング　鈴木おさむと考える骨髄バンクのこれから」を予定しておりますので、医療従事者の方々もご参加いただければ幸いです。

また、「笑顔プロジェクト」として各施設のチームの皆様から笑顔の写真を送っていただき（現在、募集中です。ぜひ登録をお願いします。登録は2025年2月12日まで）、事前参加登録していただいた方にWEBで投票（開始日は後日お知らせします）をお願いし、最も得票数が多かったチームに副賞（USJ年間パスなど）を用意させていただきます。発表は第2日目（2月28日）の会員懇親会でさせていただきますので、是非ともご協力をお願いします。その他、早起きは三文の徳（得）企画（ブレックファーストセミナー参加者）も用意しております。

本学会に参加する若い人たちがバトンを繋いで造血・免疫細胞療法をさらに発展させ、患者、ドナー、患者家族に加えて、医療従事者をはじめ、関わる皆様が笑顔になる学会になりますことを祈念しております。

そして、学会が終わりましたら、美味しいものをいっぱい食べて、いっぱい遊んで大阪を満喫していただければ幸いです。

大阪でみなさまにお会いする事を心待ちにしております。

認定・専門医制度委員会からのお知らせ

認定・専門医制度委員会委員長　　黒川　峰夫

■ 第47回学術総会における認定医企画について

1）認定医申請のための教育セミナー

本年の教育セミナーは、WEBによるオンデマンド配信（公開期間中、受講者が自由にWEBにアクセスして閲覧する形式）での開講を予定しております。

【オンデマンド配信期間】 2025年3月10日（月）13:00 ～ 5月9日（金）17:00

※聴講には第47回学術総会への参加登録が必要となります。

【ご留意事項】

- 事前の受講申請は不要で、公開期間中どなたでもご自由に聴講いただけます。
- **単位取得には、聴講後、申請フォームから申請いただき、受講料を指定口座にご納入いただいたく事が必要です**。詳細は決定次第、学会HPでご案内いたします。
- **「教育講演」とお間違えのないようご注意ください**。

【プログラム】例年の通り、以下の5分野10単位分のセミナー開講を予定しています。

No	分　野	細　目	講　師
①	（A）同種造血幹細胞移植の適応とドナーの選択	成人	河村　浩二
②		小児	吉田　奈央
③	（B）移植後の拒絶と移植片対宿主病	移植片の拒絶・生着不全とその対策	諫田　淳也
④		GVHDの診断と治療	森　　康雄
⑤	（C）拒絶・移植片対宿主病以外の移植後合併症	感染性合併症	井上　明威
⑥		非感染性合併症	伊藤　　歩
⑦	（D）骨髄・末梢血幹細胞の採取と処理、ドナーの安全性と管理	骨髄	糸永　英弘
⑧		末梢血	藤原慎一郎
⑨	（E）移植前処置の選択	成人	武内　正博
⑩		小児	荒川　ゆうき

2）認定医更新セミナー

本年の更新セミナーは、会場開催およびオンデマンド配信での開講を予定しております。過年度を踏襲し下表の対象講演に対して更新単位を付与いたします。

▼会場開催のセッション【開催日時順】（オンデマンド配信も実施予定※）

セッション名	開催日時	会場	付与単位
シンポジウム2	2月28日（金）8:40～10:40	第5会場	2単位
シンポジウム3	2月28日（金）8:40～10:40	第12会場	2単位
プレミアム企画シンポジウム	2月28日（金）13:05～15:05	第1会場	2単位
シンポジウム1	2月28日（金）15:15～16:45	第2会場	2単位
シンポジウム4	3月1日（土）9:00～11:00	第2会場	2単位
造血幹細胞移植推進事業フォーラム	3月1日（土）9:30～10:45	第10会場	1単位
シンポジウム6	3月1日（土）9:55～11:10	第14会場	2単位
特別講演	3月1日（土）10:10～11:10	第1会場	1単位
プレナリーセッション	3月1日（土）13:00～13:45	第1会場	1単位
シンポジウム5	3月1日（土）13:50～15:50	第2会場	2単位
特別教育講演	3月1日（土）16:10～17:00	第2会場	1単位

※上記セッションは**2025年3月10日（月）13:00～5月9日（金）17:00**の期間、オンデマンド配信も予定しております。ただし、都合により一部セッションがオンデマンド配信対象外となる場合がございますので予めご了承ください。

▼オンデマンド配信（WEB）のみのセッション

セッション名	配信期間	視聴方法	付与単位
教育講演1～17（全17講演）	2025年3月10日（月）13:00～5月9日（金）17:00	WEB	各1単位

【ご留意事項】

- 会場での聴講、会期後のオンデマンド配信による聴講のいずれも単位付与の対象となりますが、同一のプログラムを会場とオンデマンド配信の両方で聴講した場合でも付与される単位は1回の聴講分のみとなります。
- 更新セミナーは、開始から終了まで通して聴講した場合のみ単位が付与されます。
- 単位取得のための申請等は不要です。（会場での聴講の場合は会員カードの打刻により、オンデマンド配信での視聴の場合はアクセスログより聴講履歴を取得します）。
- 取得された単位は、会員マイページへ反映いたします。作業完了次第、メールでお知らせいたします。作業にはオンデマンド配信期間終了後1ヶ月ほどかかる予定です。

看護部会企画

《学会看護の見どころ》
第47回日本造血・免疫細胞療法学会総会のご案内

鶴田　理恵（大阪公立大学医学部附属病院　看護部）
足利　知美（大阪公立大学医学部附属病院　看護部）

第47回日本造血・免疫細胞療法学会総会が、2025年2月27日（木）～3月1日（土）の3日間、大阪国際会議場【グランキューブ大阪】（大阪市北区中之島）で開催されます。会長は、大阪公立大学血液腫瘍制御学教授の日野雅之先生です。附属病院のスタッフと、各方面に精通する先生方に企画委員に加わっていただき、現在準備を進めております。

大阪開催は、2019年第41回大会を最後に6年ぶりとなります。今回のテーマは、『みんなが笑顔になりますように～SMILE～』です。関西は「三方良し」の考えがあります。「三方良し」は、近江商人の経営哲学のひとつで、「売り手よし」「買い手よし」「世間よし」の三方が満足している状態を指します。自分だけの利益を追求するのではなく、社会全体の幸福を願う考え方です。『SMILE』には、まさに、「患者・ドナー・患者家族よし」「医療従事者よし」「移植チーム・社会制度よし」といった、関わる「みんなが笑顔になる」素晴らしい造血細胞移植、免疫細胞療法を確立できること、その笑顔を次世代に繋いでいくことへの願いが込められています。

複雑な病態が解明され、移植治療、抗体治療、分子標的薬など新たな治療法や、支持療法の開発がすすみ、小児から高齢者まで多くの患者の選択肢は増えました。治療の背後には、日常生活に支障が出る治療選択も少なからずあります。看護系は『意思決定支援』を主軸に企画しました。看護シンポジウムのテーマは「血液疾患患者の治療選択における意思決定支援」としました。血液疾患患者の様々な病期・場面でどのような意思決定支援を行うのか、再発を繰り返す患者さんにどう寄り添うのか、患者・家族と医療者間の認識の相違がある場合にどう関わるか、子どもや、家族ドナーへの擁護など、日々悩みながら看護を行っていることを皆で考える機会となると思います。また、「ACP」の課題にも目を向け、教育講演を企画しました。また、チーム医療では「地域移植患者の治療と生活をつなぐ在宅医療～病院から在宅へ患者の笑顔をつなごう～」のテーマで、地域で奮闘されている演者をお招きしました。移植施設中心で行ってきたケアから、患者の生き方を尊重した医療の実現にむけ、患者の生活を主体に考える看護へと発展させなければなりません。他にも、患者体験者の声をきいて考える「就学・就労支援」、小児AYAをテーマの「がん治療を支える栄養支援～生きる力を育む食～」、あらためて基礎から学ぶ「実臨床における慢性GVHDの診断と治療」等を企画しています。

第47回日本造血・免疫細胞療法学会総会では、患者体験者も含めた移植関係者が最新の知見とディスカッションを通して満足の笑顔となり、新たな医療に挑戦する力を掲げて現場に還元していただけることを願います。最後に、「Smil企画」の応募も始まっております。ご多忙な時期とは存じますが、是非多くの方々が笑顔で来阪いただくことをお待ちしております。

【看護部委員会よりメッセージ】

3月1日（土）には看護グループミィーティングを予定しています。テーマに沿って意見交換を行うことで、すぐにでも現場でいかせる情報を得られる貴重な機会です。ご参加を心よりお待ちしています。

申し込み方法は学会ホームページでご確認下さい。

https://convention.jtbcom.co.jp/jstct2025/

たくさんの方々に参加いただくことを祈念しております。

私の選んだ重要論文

D. Wolff, C. Cutler, S.J. Lee, et al,
Axatilimab in Recurrent or Refractory Chronic Graft-versus-Host Disease
N Engl J Med. 2024; 391（11）: 1002-1014. doi:10.1056/NEJMoa2401537.

同種造血幹細胞移植後合併症として問題となる慢性GVHDに対してようやく本邦でもibrutinib, ruxolitinib, belumosudilの3剤が使用可能となった。これらの薬剤はすでに多くの臨床家にとって使用経験があり、奏効する症例・症状、特有の有害事象を経験しているのではないだろうか。問題は3剤の有効性が十分に得られない症例、有害事象のため継続できない症例などの存在である。本論文はこれら3剤のいずれかの使用歴がある難治性慢性GVHDに対するaxatilimabのPhase II試験結果である。

Axatilimabはcolony-stimulating factor1の受容体であるCSF1Rに対する抗体薬である。慢性GVHDにおいて、CSF1が単球、マクロファージに存在するCSF1Rを介して炎症・線維化を進行させることが知られている。AxatilimabはCSF1Rを介した反応をブロックする。先行する少数例のPhaseI/II試験で慢性GVHDに対する本薬剤の至適投与量と有効性が検討され、高い奏効率が報告されていた（J Clin Oncol. 2023;41（10）: 1864-1875）。今回、投与量を0.3mg/kgまたは1mg/kgを2週に1回投与、そして3mg/kgを4週に1回投与する3群間でPhase II試験が行われた。各群の症例数は80～81症例であった。対象症例はibrutinib, ruxolitinib, belumosudilのうち少なくとも1剤の使用歴がある慢性GVHD症例で、各群とも約8割の症例が重症慢性GVHDの症例であった。主要評価項目は6サイクル投与までの奏効率で、0.3mg/kg投与群で最も奏効率が高く、74%（95% CI, 63-83）であった。むしろ、投与量が1mg/kgや3mg/kgでの奏効率が低く、グレード3以上の有害事象の発症率、有害事象による試験の中断割合が多い結果であった。最も注目すべきはこれまで奏効率が十分といえる治療薬が存在していなかった慢性GVHDの肺病変に対して47%の奏効率が得られている点といえる。また、有害事象では肝障害、CPK上昇と検査値異常が主であった。

本邦ではようやく3剤の慢性GVHD治療薬がそろったところであるが、さらに有力なaxatilimabの登場により慢性GVHD治療の奥行きは確実に広がると考える。繊維化阻害作用が期待される本薬剤は、軽症GVHDの時点で使用し、臓器障害の進行を予防する効果が期待できるのではないかと考える。さらなる臨床試験の結果に目が離せない薬剤である。

東海大学内科学系血液腫瘍内科　　鬼塚　真仁

施設紹介

虎の門病院　血液内科

内田　直之

虎の門病院は、病床数が819床、40を超える診療科を有する総合病院です。官公庁、米国大使館、首相官邸や国会議事堂など政界の中心と目と鼻の先である東京都港区に位置し、最近は周辺の再開発で超高層ビルが林立し、数年前と比べても風景が一変しました。最寄り駅が銀座線虎ノ門駅から日比谷線虎ノ門ヒルズ駅となり、同駅から直結の屋根付き通路が完成間近です。初代院長の大槻菊男先生の、「医学への精進と貢献、病者への献身と奉仕を旨とし、その時代時代になしうる最良の医療を提供すること」との基本理念から、進取の気概に満ちた多くの先人達によって診療体制が構築され、現在も受け継がれています。

血液内科は現在120名ほどの入院患者の診療を9名のスタッフで行っています。2003年に前部長の谷口修一先生（現浜の町病院院長）が赴任し、前年まで年間50件程だった造血細胞移植が一気に120件となり、以降2017年の174件をピークに140件前後実施しています。現在は2019年に竣工した新病院で48床のクリーンルームが稼働しています。先端医療としてCAR-T細胞療法も、山本豪部長、梶大介医長中心に月2－5件実施している一方、総合病院の血液内科として非悪性疾患にも万遍なく対応しています。

当院は臍帯血移植の実施件数が年間120件と多いことが特徴です。私が入職した2005年当時は臍帯血移植の黎明期で、生着不全や生着前死亡も多く、実施件数も全国で現在の半分以下でした。その臍帯血移植が、今や国内の実施件数が他ドナーを超え、特にハイリスク患者では成績も凌駕するようになったことには隔世の感があります。当院は臓器別の専門診療科が多数揃っており、合併症を有する患者や高齢者でも必要とあらば移植を提供してきました。その結果、治療成績も少しずつ改善してきておりますが、今なお合併症制御、及び移植後再発には苦闘を強いられており、まだまだ道半ばです。週2回のカンファレンスでは一症例一症例真摯に考え、そこから得られる問題解決の糸口を見逃さないよう心がけると共に、当院を頼って来られる患者さんと最後まで諦めずに考え抜く覚悟をスタッフ皆で共有しています。

また、2010年より移植後LTFU外来を森有紀部長中心に行っておりましたが、2022年に、各専門科医師、歯科医師、看護師、薬剤師、栄養士などによる造血細胞移植後LTFUセンターを設立しました。ここでは各専門領域のエキスパートが連携して、移植後合併症管理・支援を総合的かつ長期的にサポートしています。（https://toranomon.kkr.or.jp/cms/departments/zoketsu-follow-up/）。最近では移植後数年以上経過した患者さんで問題となる内分泌異常、生活習慣病等の晩期合併症や二次発がんに対処するため、当院付属の健診センターと連携し、生涯フォローアップの体制を作っています。

2020年度より、厚生労働省の造血幹細胞移植推進拠点病院に選定されました。本事業を通して、多くの施設と連携し、各施設の移植医療体制の整備のお手伝いをしています。特に人材育成には力を入れており、医師・看護師・HCTCの研修を受けています。短期間で効率よく多数

の症例が経験でき、臍帯血移植は週2-3件のペースで実施しておりますので、特有の合併症やマネージメントについて実際に体験しながら学ぶことが可能です。医師研修者には臨床研究にも携わり、国内外の学会発表や論文作成頂いています。昨今欧米式のレジストリーデータの解析から多くの成果が報告され、数千～数万のデータの集計から見えてくる結果は貴重ですが、背景因子の異なる雑多な集団の解析で見えなくなってしまう真実もあります。当院単施設での解析は、数百～数千の患者集団の一定のポリシーの下での診療結果であること、カルテ情報まで分け入って解析できる点が、レジストリーデータに無い利点であり、新たな知見の発信源となるばかりか、診療内容を直ちに変更させる力があります。ご興味のある先生は、是非下記までご連絡下さい。

虎の門病院血液内科　内田直之
虎の門病院造血幹細胞移植地域連携支援センター事務局（tora-kyoten@toranomon.gr.jp）

会員の声

これまでの移植との関わり ～腸管TMAの思い出～

日本赤十字社愛知医療センター名古屋第一病院　血液内科　　西田　徹也

今回「会員の声」を担当することとなりました日本赤十字社愛知医療センター名古屋第一病院の西田です。昨年3月の第46回日本造血・免疫細胞療法学会総会の同種移植開始50周年記念シンポジウムにおきまして「名古屋における造血細胞移植の歴史」を発表する機会をいただきましたので、今回は私の移植との関わりを振り返ってみようと思います。

私は30年前の1995年4月に名古屋第一赤十字病院で研修医として医師としての一歩を踏み出すとともに、小寺良尚先生のご指導のもと移植を学び始めました。その当時はまだ、移植患者さんはクリーンルームに入る前にはイソジン浴で全身を消毒、医師は宇宙服とまでは言いませんが、手術着のようなものを着て、1日1回だけクリーンルームに入室して診察や採血を行っていました。GVHD予防にタクロリムスが使用されるようになってきた頃ですが、grade 4の急性GVHDもしばしば起こり、看護師さんと毎日1時間以上かけて皮膚処置をすることもありました。また、多量の下痢とともに剥離した腸粘膜がでてくることも時々経験しました。急性GVHDだから免疫抑制を強めるというのが当時の治療でしたが、ステロイドパルスなど免疫抑制を強化しても一向に改善しない、そのような患者さんが続く中、当時の病理部長・平林紀男先生よりthrombotic-microangiopathy（TMA）による虚血性腸炎が原因ではとのコメントをいただき、検討の結果、これまでの治療方針を180度変更し免疫抑制を減弱するようにしたところ、下痢が減少、状態が改善する患者さんが見られるようになりました。腸管GVHDの一部ではないかなど腸管TMAの概念はなかなか受け入れられず、名古屋の風土病？との声も耳にすることがありましたが、濱口元洋先生にご指導いただき腸管TMA症例16例をまとめて、2004年にBMT誌に投稿し受理されました。

その後、名古屋大学大学院を経て、赤塚美樹先生、村田誠先生が留学されていた縁でフレッドハッチンソンがん研究センター（FHCRC）のProf. Stanley R. Riddellのラボに留学する機会をいただきました。基礎研究での留学であり、CLLに対する同種移植後の免疫応答などの研究を行っていましたが、研究の合間に自分のBMTの論文を手にして病理のProf. George Saleのもとを訪ね、腸管TMAについて意見を伺ってみたところとても興味を持って下さり、腸管TMAのセミナーを開催していただきました。そのセミナーには名古屋第一赤十字病院から伊藤雅文先生、宮村耕一先生も参加して下さり、移植後の消化管合併症としての腸管TMAを認識していただく大変貴重な機会となりました。その甲斐があったかは定かではありませんが、移植の教科書“Thomas’ Hematopoietic Cell Transplantation”の中で腸管GVHDの鑑別の一つに腸管TMAが加わりました。

3年8か月の留学後は名古屋大学に戻り、移植後難治性CMV感染症に対する細胞傷害性Tリンパ球療法など新たな治療法の開発などにも取り組み、2021年4月に20年ぶりに懐かしい名古屋第一赤十字病院に戻ってきました。現在は、研修医・専攻医など多くの若い先生から刺激を受け、新たな気持ちで移植に取り組んでいます。移植医療の進歩により最近は皮膚剥離やひどい下痢の患者さんは少なくなりましたが、新しいことだけでなくこれまでの経験を若い世代に伝え、より良い移植医療を患者さんに届けていきたいと思います。

次回は、シアトルでの留学で家族ぐるみの付き合いをさせていただいた岡山大学の藤井伸治先生にバトンをつなぎたいと思います。藤井先生、よろしくお願いします。

次号予告　次回は、岡山大学　藤井　伸治 先生です！

各種委員会からのお知らせ

【賞等選考委員会】

2024年度の造血細胞移植功労賞、日本造血・免疫細胞療法学会学会賞の受賞者が決定いたしましたのでご案内申し上げます。

《造血細胞移植功労賞（医師）》

河　敬世 先生（大阪母子医療センター　顧問）

《造血細胞移植功労賞（非医師）》

高坂　久美子 様（日本赤十字社愛知医療センター名古屋第一病院　感染管理室）

《日本造血・免疫細胞療法学会学会賞》

前田　嘉信 先生（岡山大学　血液・腫瘍内科）

第47回日本造血・免疫細胞療法学会総会の会期中、以下の日程で授賞式、学会賞受賞記念講演がございますので、会員の皆様におかれましてはぜひご来場ください。

■ 造血細胞移植功労賞／日本造血・免疫細胞療法学会学会賞　授賞式

日　時：2025年2月28日（金）10時50分～11時50分
会　場：大阪国際会議場　大ホール（第1会場）

※当日は学会の各種表彰式も合わせて実施いたします。

■ 日本造血・免疫細胞療法学会学会賞　受賞記念講演

日　時：2025年3月1日（土）12時35分～12時55分
会　場：大阪国際会議場　大ホール（第1会場）

委員長　　熱田　由子

一般社団法人　日本造血・免疫細胞療法学会　事務局
名古屋市西区那古野二丁目23-21-7d号（〒451-0042）
Tel: 052-766-7127　Fax: 052-766-7137　E-mail: jstct_office@jstct.or.jp　https://www.jstct.or.jp/